

能界展望(平成5年)

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research
Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

147

(終了ページ / End Page)

156

(発行年 / Year)

1995-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020468>

能界展望（平成5年）

西野春雄

概観

平成五年の能界は、ここ数年の動向と大きく変わることはなかった。催しの数も種類も豊富になり、宝生新五十回忌追善能（谷行ほか）や十三世梅若万三郎三回忌追善能をはじめとする記念能も各地で催された。とくに昭和五十八年に開場した国立能楽堂が十周年の節目を迎え、その記念公演や連続シンポジウムや特別展示もあり、もう十年になったのか、という感慨を深くした。

また、観世文庫設立記念の展覧会「観世宗家―幽玄の華」、浅井能楽資料館の開館展示、東西の近現代能面作家の新面を中心とした能面展、など、能楽をテーマとする多彩な展覧会が集中した年でもあった。一方、ジャーナリズムに目を向けると、唯一の能評雑誌の『現代能楽』が二五号で終刊となり、過密な催しの数に比べ能楽批評・論壇界は不振といわざるをえない。

地方に目を転じると、越谷市に日本文化伝承の館「こしがや能楽堂」が落成、本願寺の能舞台のような屋外の建物で、見所は中庭や別棟の大広間で合計一〇一二名収容できるとい

う。また横浜市・名古屋市などでも能楽堂の建設が進んでおり、能・狂言を楽しむ人々の裾野が広がってゆくのは頼もしいかぎりである。地域に根差し、地域の人達の期待を裏切らないような運営を望みたい。

新しいといえば、楽劇学会が誕生した。この聞き馴れない楽劇という言葉からは、坪内逍遙の新楽劇論やワーグナーの楽劇を思い出す人も多そうであるが、詳しくは後述するとして、能・狂言をはじめとする日本の楽劇諸種目の研究・制作・奏演・評論などに携わる者の相互交流を図り、「楽劇学」の確立と進展をはかることを目的としている。

以下、主に記録を中心に平成五年の大概を述べる。

国立能楽堂開場十周年

九月、国立能楽堂が開場十周年を迎えた。国立能楽堂の事業は、(一)能楽の公開、(二)能楽伝承者の養成、(三)能楽に関する調査研究及び記録の作成、(四)その他、に大別されるが、十年の歩みは、部門によって違いはあるが、総体的に見てかなりの成果をあげて来たと思う。

(一)には、定例公演・普及公演・特別公演・狂言の会・能楽

鑑賞教室・研究公演（復曲など）・能楽若手研究会・企画公演（外国人のための鑑賞教室ほか）・公開講座・各種展示の開催（常設展・特別展・企画展）、などがあげられるが、それぞれの公演とも、企画も穏当で、各流の特性や諸事情・配役にも気を配りつつ、芸術的にも一定の水準を維持し続けて来ている。開場から平成五年度までの有料入場者数は約三十九万人、公演回数は六百五十五回を数えた。単純には比較できないかもしれないが、歌舞伎を主体とする国立劇場に比べて興業的にも成功している。能楽界の旧習・旧弊にめげず、調整しつつスタートした設立当初の路線が、企画性や芸術性と興業性との均衡をうまく取っていると思う。小書をめぐって演者側と決着を見ない設立当初からの懸案事項をはじめ困難な諸問題がいろいろあると思うけれど、主張すべきは主張し、正々堂々と進めて行ってもらいたい。

(二)は59年度から開始され、国立能楽堂の柱の一つとして三役（ワキ方・囃子方・狂言方）の養成に取り組んで来た。一期三年間の研修期間を終えたのち一定の既成者研修を経て一人前となるが、平成五年十二月現在、第四期生まで進み、第一期・二期生はすでに舞台を勤めている。成果は役籍により異なるのはやむを得ないが、指導に当たる講師陣の努力のわりには、歩留まり率がいいとは言えない実情を見るにつけて、国立能楽堂自身が組織も含めて抜本的に再検討すべき段階に來ているのではあるまいか。すべてが十年一日とは思えず、これまでも種々工夫が施されて來たが、やや惰性に流れ、

設立当初の精神が忘れかけているような気がしてならない。国技の相撲には相撲学校があり、イギリスには演劇学校があつて役者を養成しているが、そういった養成機関の運営なども参考にしつつ、根本的な見直しを切望したい。

(三)については、調査研究の基礎となる資料の蒐集は着実に進んでおり、そうした成果の一端が所蔵の逸品を展示した十周年記念展であつた。自主公演と違い、資料収集や調査活動は目立たないが、国立能楽堂に収まって良かったと思う絵画資料や文献の類は数多い。各種展示の図録、国立能楽堂制作による映画の数々など、十年間の蓄積は刮目される。今後はさらなる活用を図っていただきたい。

さまざまに催し

月並能・定期能をはじめ、追善能や襲名披露能、そして各地の神社仏閣・城閣・公演緑地・ホール、はては漁市場などでの薪能、明治の能楽復興の象徴であり百年余の歴史を刻む東京最古の靖国神社能舞台での夜桜能など、平成五年も各様催しがあつた。復曲能や復曲狂言がある一方、新作能もあつたし、意欲的な企画公演もあつた。ここでは、ほんの一端を紹介したい。

意欲的な企画では大槻能楽堂改築十周年記念の催しがあげられる。その一つが片山九郎右衛門・野村四郎・大槻文蔵・梅若六郎・観世鍔之丞の五氏による五回連続公演「道成寺」フェスティバルで（5月9・15・22・29日・6月5日）、初日から

赤頭之伝・中之段数躰、赤頭之伝、小書なし、替装束・崩之伝・五段之舞、中之段数躰・無躰之崩、と演者それぞれ秘術を尽くした連続上演で、話題を呼んだ。

第二弾が七月の五流競演ろうそく能で、連日、五流の手揃いが技を競い、秋から第三弾「能の変遷——六百年の流れの中で」シリーズが始まり、①「能の変遷について」鼎談(表章・伊藤正義・堂本正樹氏、司会天野文雄氏)、恋重荷(泉嘉夫)、②「シテ一人主義への変遷」羽田昶氏、鶉飼(観世栄夫・大槻文蔵)、③「書き直された能」西野春雄、世阿弥本による雲林院(浅見真州)、④「現代に訴える演出・そして未来へ」堂本正樹氏、昭君(観世鍔之丞・観世暁夫・西村高夫・斎藤信隆)が、それぞれ持ち味を生かした演技を展開した(9月12月)。

新作能では、数年前に心臓移植問題をテーマにした「無明井」を発表して話題を呼んだ多田富雄氏が、こんどは第二次世界大戦が始まるうとしていた一九三〇年代に、朝鮮半島から強制連行され九州の炭鉱労働に従事させられた不幸な事件に取材した「望恨歌」を創作し、九月二十七日、節付・主演橋岡久馬で上演された(於・国立能楽堂)。老女物に準じた作品であるが、テーマといい、脚色といい、新作能の方向として、いろいろ考えさせられた好機会であった。作者によると、「韓国の老女に「恨の舞」を舞わせることに、現代的必然性があると思われた。それは、演劇としての能の、なすべきことのひとつでもあると信じている。」とあるが、当日の演技を見

る限り、それ程の必然性は感じらず、むしろアイ韓国の村人役の大島寛治の剛直な演技が、最も印象に残った。

復曲活動では、梅若六郎の会の「護法」(補綴・堂本正樹、演出・梅若六郎)が、名取の老女を茂山千五郎(のち千作を襲名)、ワキ山伏を山本東次郎、護法善神を大槻文蔵にした配役が功を奏し、現代に鮮やかに蘇った。ほかには、西宮市民市民能での吉井順一主演による「恵美寿」、能劇の座による「実方」(能本作成・西野春雄・羽田昶、主演・観世栄夫)、第四回国立能楽堂研究公演での「雪鬼」(能本・西野春雄、演出・羽田昶、節仕形付・香川靖嗣ほか、主演・香川靖嗣)があり、同じく研究公演では最古の狂言筋書本『天正狂言本』にのみ伝わる「近衛殿申し状」(台本作成・橋本朝生、演出主演・山本東次郎)が舞台にかけられた。

これ以外に、むしろ常の会に、好演や熱演が見られたが、今は省略に従いたい。

楽劇学会の設立

「芸能研究の現状はあまりにもばらばらである。それぞれが狭い専門分野に閉じこもって交流がない。能研究者は歌舞伎を知らず、歌舞伎研究者は人形浄瑠璃を知らない。音楽研究者は目をつぶって音のみを追い、文献的研究者は舞台そっちのけで書物をめくる。これで本当の研究ができるのだろうか。芸能の研究者のひとりとして、わたくしはいまそのことに深く思いを巡らしている。(中略)現実性のある唯一の方法

は、楽劇学会の設立だとわたくしは考えている」。かつて、横道萬里雄氏は著書『能劇の研究』（一九八六年九月、岩波書店）で、芸能の総合的・立体的研究の必要性をこのように強調し、楽劇学を提唱し学会の設立を構想されていた。本誌第十三号（昭和63年3月）の本欄でも、昭和六十二年九月に開催の横道萬里雄氏の古希を祝う楽劇の集いのことを報告し、楽劇学会が近い将来に設立されることを祈りたい、と記したが、平成四年春、有志による設立準備委員会が結成され一年間かけて準備を進め、平成五年四月に設立された。

日本の楽劇の研究・制作・奏演・評論などに携わる者の相互交流により、楽劇学の確立と進展をはかることを目的とするもので、設立大会が東京青山の缺仙会能楽研修所で開かれた。会員四百名で発足。総会のあと、①横道萬里雄会長の基調講演「楽劇学会への提唱」、②研究集会「せりふ術の比較研究」：一 奏演1大名なぐさみ曾我（録音テープによる）、2 けいせい仏の原（その1録音テープ、その2実演 野村万之丞（万蔵）、ニ シンポジウム「せりふ術の比較研究」堂本正樹・野村万之丞・服部幸雄・横道萬里雄・司会内山美樹子の各氏で進められた。

大会の様子は機関紙『楽劇学』創刊号（一九九四年三月刊）に詳しいが、同号の「創刊のことば」に「楽劇」の概念、会の目的、性格などが謳われている。対象となる伝統芸能の分野は実に多彩で、雅楽・田楽・延年・声明・能・狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃・邦楽・日本舞踊・組踊・琉舞・各種の民

俗芸能などである。生まれればかりの学会であり、学問としてまだ市民権を得ていないかもしれないが、既存の学会とは趣を異にする面も多く、何よりも、楽劇の創造の現場に密着した研究、専門領域や時代区分を超えた研究を積極的に進め、実績を重ねていくことが課題である。

『現代能楽』の終刊

昭和六十一年四月、大河内俊輝・草深清・辻野透・藤城継夫・堀上謙氏の五人の同人によって創刊された能評専門誌『現代能楽』（能楽出版社発行）が、七月二十五日発行の二十五号をもって終刊となった。創刊号で大河内氏は「発刊の意義」の結びに「気になる雑誌、無視し得ない雑誌、読まざるはいろいろな雑誌」を標榜され、批評活動を展開されて来た。これまでの同誌の歩みを見ると、首肯される面も、首をかしげざるをえない面もあるが、ともかく「言いたい事」を言い、「書きたい事」を「歯に衣着せず」発表し続け、批評不振の現代に、能楽ジャーナリズムを形成しようとした姿勢に対し、敬意を表したい。

ただ、同人による匿名の能界展望（評談）は、ついに匿名のまま終わったのは異論がある。この欄を天声人語だとか、歯に衣着せずとか言って、歓迎する向きもあるが、無責任のそしりは免れまい。今でも選挙の結果などに対し新聞で担当記者たちによる匿名座談が載ることもあるが、かつて能楽評論界の先輩たちは、雑誌『能楽』の放談会でも『謡曲界』

の座談会でも、発言を匿名にせず、堂々と責任を持たせていた。活字にするからには、それなりの覚悟がある。同人諸氏はもとより覚悟の上であろうが、これでは闇討ち同然である。

戦後の能楽協会発行の『能』(昭和22〜28年)から、同人誌『能楽思潮』(33〜48年)、同じく『能楽評論』(49〜59年)のあとに続いて発行された『現代能楽』だったが、終刊によって、能楽論壇界はまた寂しくなる。世阿弥の昔を持ち出すまでもなく、鑑賞眼の高い義持の批評が能の質を向上させた。出でよ!能楽雑誌、である。(なお、平成六年九月に『能楽ジャーナル』が、同人大河内俊輝・小林保治・堀上謙・馬場あき子・鷺尾星児氏によって創刊されたことを付記しておく)。

展覧会のやまやま

● 観世宗家―幽玄の華

「能の大成者である観阿弥・世阿弥の嫡流として、長く能楽の継承にあたってきた観世宗家とその一門が平成三年二月に設立した財団法人観世文庫」の設立を記念して、展覧会「観世宗家―幽玄の華」が、一月三日の東京(銀座の松屋)を皮切りに九月二十七日の久留米市まで、全国九都市で開催された。

世阿弥自筆能本、世阿弥能楽論書ほかの古文書、能面、将軍拝領の装束など重要美術品を含む名品百四十余点が公開され、絶大な人気を呼んだ。観覧者総数は二十万人を越えたと

いう。

観世清和・表章監修『観世宗家 幽玄の華』(朝日新聞社発行)の図録も充実しており、展示に花を添えた。

● 浅井能楽資料館・山口能装束研究所の設立

滋賀県東浅井郡浅井町に能楽資料館が完成、五月十八日開館式が行われた。この資料館は京都の山口能装束研究所長の山口憲氏が、江戸時代から養蚕地として名高い湖北の浅井町に、能装束の調査研究・復元と、能楽情報の蒐集基地となるようにと建設したものである。正式な名前は、佐藤芳彦記念浅井能楽資料で、山口氏を能楽に導いた佐藤芳彦氏を記念するとともに、伝統文化フォーラム(代表・北川善太郎京都大学教授)の事務所を兼ねる。

緑豊かな田園風景の中に建つ資料館には、能装束を中心に、能面、養蚕の様子や繭・生糸・染料、機織り機が展示され、桑畑に囲まれた周囲には染料となる草木も育成されている。開館当日は三笠宮妃殿下や関係者多数が来訪した。館長は長年浅井の地で養蚕に携わっておられる辻陶吉氏。

● 新面展の開催

早稲田大学演劇博物館主催による、昭和初期から現代にいたる東西の能面作者の展覧会が、十月・十一月の二カ月間、同館にて開かれた。前期は、入江美法・鈴木慶雲(ともに故人)・長沢氏春・橋岡一路・北沢三次郎・谷口朗子氏の関東在住の作家が、後期は、中村直彦・北沢如意(ともに故人)・堀安右衛門・石倉耕春・北沢一念・見市泰男氏の関西在住の

作家が中心であった。両期とも百点つつ計二百点にも及ぶ膨大な点数で、昭和・平成期の能面展としては、空前の規模というべく、圧巻であった。それぞれの作家の作風や個性が伺われるとともに、おのずから東西の作家の力量が推し量られ、有益な展覧会であった。特に東京の人にはあまり知られていない関西の作家たちの能面を間近に見ることができた好機であった。そして、東にも優れた能面もあったが、なんとなく西高東低の感を抱いた。

能面の魅力は尽きない。能面教室・カルチャーセンターなどの講習会も盛んで、型紙付きの図録まで出版されるなど、素人による能面制作は今やブームとなり、見様見真似の乱作時代に入っているという。たしかに、個展やグループ展も盛んだ。しかし、本物には、なかなか逢えない。だが、創作期の精神に学び、原点を見つめ、心を寄せ、互いに切磋琢磨し修業を重ねていくなれば、いつか、玄人の能面作家が生まれるかもしれない。

●国立能楽堂開場10周年記念 特別展示

林原美術館蔵 備前池田家伝来の能面・能装束

昭和五十八年九月に開場した国立能楽堂で、開場十周年を記念し、十月三十一日から十二月一日まで、東洋古美術のコレクションで知られる林原美術館（岡山市丸の内）が所蔵する旧岡山藩主池田家伝来の膨大な能面・能装束の中から能・狂言面三十三点と、質・量ともに卓越した内容で知られる能装束の内、重要文化財二点を含む二十八点が展観された。

すべてカラーの図録も有益で、竹本幹夫「岡山藩池田家と能楽」、田邊三郎助「備前池田家伝来の能・狂言面」、切畑健「備前池田家伝来の能装束抄―歴代と装束―」、付表を収める。

荣誉・受賞など

◎春の叙勲 4月29日付

・元国際日本文化研究センター教授ドナルド・キーン氏。

勲二等旭日重光章

・シテ方宝生流 武田喜永氏。

勲五等双光旭日章

◎第23回モービル音楽賞（邦楽部門）

笛方一噌流 一噌幸政氏。

氏は祖父の十二世宗家一噌又六郎氏および藤田大五郎氏らに師事。力強い能管を、曲趣に応じて多彩な表現で聴かせることと定評があり、また法政大学主催の世阿弥本「雲林院」、「鐘巻」の復曲などでも力を尽くした。

◎秋の叙勲 11月3日付

・シテ方宝生流 三川泉氏。

勲五等双光旭日章

◎秋の褒賞 11月1日付

芸能史研究 後藤 淑氏（昭和女子大学教授）

紫綬褒章

◎第13回伝統文化ポौरア大賞

野上記念法政大学能楽研究所(所長表章)

永年にわたって従事してきた能楽研究の成果と、能楽の現場においてその成果を積極的に生かす活動を行って、能界の活性化に大きな役割を果たし、能楽の存続と発展に寄与してきた功績に対して。(別記彙報参照)

◎文部省地域文化功労者

シテ方観世流 小島健三氏。《新潟能》(昭和30年より始まる)の運営に尽力し、能楽の普及を通して地域文化の発展に貢献した功績に対して。

◎芸術祭賞

狂言方泉流 野村耕介氏。「大田楽―日枝赤坂―」の構成・演出に対して。

◎第15回観世寿夫賞法政大学能楽賞

高安流大鼓方安福建雄氏。高安流大鼓方柿原崇志氏。葛野流大鼓方亀井忠雄氏。(別記彙報参照)

◎第6回催花賞

該当者なし。

◎大阪文化祭賞

狂言方大蔵流 善竹圭五郎・善竹十郎氏。
善竹狂言会(於・大阪能楽会館)での「月見座頭」の舞台成果に対して。

◎芸術選奨文部大臣賞(平成五年度)

シテ方観世流 野村四郎氏。

◎第一回読売演劇大賞特別賞(6年2月6日付)

シテ方観世流 梅若六郎氏。受賞対象は梅若六郎の会での復曲能「護法」、および鎌倉芸術館開館記念公演の「吉野静」の演出に対して。

◎京都府文化功労賞(6年2月21日)

狂言方大蔵流 茂山忠三郎氏。

◎京都市芸術新人賞

シテ方金剛流 種田道一氏。

◎釧新郷土芸術賞

シテ方宝生流 高橋義雄・高橋秀一氏。

能楽協会関係

5月27日、第48回能楽協会定時総会において、任期満了に伴う役員の変更を行い、次の諸氏が新役員に就任した。

《理事長》片山九郎右衛門

《常務理事》梅若六郎・金春安明・朝倉桑太郎・廣田泰三・

香川靖次・宝生閑・亀井忠雄・野村万蔵

《理事》坂井音重・浅見真州・武田志房・櫻間辰之・寺井良

雄・金剛永謹・大村定・福王茂十郎・一噌仙幸・鶴澤速

雄・小寺佐七・曾和博朗・山本則直

《常務理事・東京支部長》関根祥六

《理事・名古屋支部長》野村又三郎

《同北陸支部長》山田太佐久

《同京都支部長》片山慶次郎

《同大阪支部長》大槻文蔵

《同神戸支部長》

吉井順一

《監事》

渡辺三郎・松常太郎

○会員数（5年5月27日現在）一四三九名

〔シテ方〕 観世流641 金春流116 宝生流143 金剛流82

〔ワキ方〕 喜多流62 小計一〇五四名

〔笛方〕 高安流22 福王流21 宝生流24 小計67名

〔一噌流〕 一噌流11 森田流45 藤田流5 小計61名

〔小鼓方〕 幸流25 幸清流11 大倉流17 観世流9 小計62名

〔大鼓方〕 葛野流12 高安流14 大倉流13 石井流11 観世

流3 小計53名

〔太鼓方〕 観世流16 金春流22 小計38名

〔狂言方〕 大蔵流82 和泉流32 小計114名

支部別 東京612 名古屋94 北陸51 京都179 大阪264

神戸72 本部扱167

◎日本能楽会

《会長》宝生英雄（シテ方宝生流）

《常務理事》観世清和・金春信高・金剛巖・喜多六平太・宝

生閑・金春惣右衛門・和泉元秀

《理事》野村四郎・井上嘉久・大槻文蔵・高橋汎・宝生英

照・辰巳孝・廣田隆一・粟谷菊生・福王茂十郎・森田順

人・藤田大五郎・鶴澤壽・宮増純三・安福建雄・山本孝・

観世元信・善竹幸四郎

《監事》幸正影・江島尤一

○会員数（6年5月27日現在）四〇四名

〔シテ方〕 観世流185 金春流9 宝生流38 金剛流12 喜多

流20 小計264名

〔ワキ方〕 高安流9 福王流7 宝生流5 小計21名

〔笛方〕 一噌流5 森田流14 藤田流2 小計21名

〔小鼓方〕 幸流10 幸清流5 大倉流7 観世流2 小計24名

〔大鼓方〕 葛野流6 高安流5 大倉流7 石井流4 観世

流1 小計23名

〔太鼓方〕 観世流5 金春流10 小計15名

〔狂言方〕 大蔵流25 和泉流12 小計37名

物故者

●大坪十喜雄氏

シテ方宝生流。5年1月9日、急性心不全のため、熱海市の所記念病院で死去。享年84歳。明治41年東京生れ。十七世宝生九郎（重英）に入門。昭和14年から20年まで東京音楽学校（現東京芸術大学）邦楽科教官、宝生会常務理事、能楽協会理事長を歴任。昭和54年勲五等双光旭日章受賞。日本能楽会会員（昭和40年以来）。『宝生』平成五年二月号に追悼記事。

●戸板康二氏

演劇評論家。5年1月23日、高血圧性心不全のため、死去。享年77歳。折口信夫に民俗学を学んで演劇研究への道へ。昭和27年『今日の歌舞伎』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。52年芸術院賞、平成3年芸術院会員となる。『観世』誌復刊以来、折々随筆など執筆。能楽懇談会会員。

●清水要之助氏

シテ方観世流。5年3月24日、肺癌のため、横浜市の国際親善総合病院で死去。享年91歳。明治35年に東京生れ、40年「雲雀山」の子方で初舞台。大正8年観世元滋(二十四世左近)に入門。以来七十余年地謡方一筋に舞台を勤め、流儀の古格を守る礎となった。能楽協会理事・観世会理事などを歴任。日本能楽会会員(昭和40年以来)。昭和53年、勲五等双光旭日章受章。『観世』平成五年七月号に追悼記事。

●野村蘭作氏

シテ方宝生流。5年3月24日、心肺機能不全のため、東京医科大学病院で死去。享年88歳。明治37年新潟県佐渡生れ。十七世宝生九郎(重英)に入門。また宝生嘉内の指導も受ける。金沢藩お抱えの脇家野村家に入籍。昭和31年に前名論を改め、蘭作を襲名。昭和53年、勲五等双光旭日章受章。日本能楽会会員(昭和41年以来)。『宝生』五年四月号に追悼記事。

●西村欽也氏

ワキ方高安流宗家預り。5年3月28日、肺癌のため、名古屋市の病院で死去。享年69歳。大正12年11月1日西村弘敬の次男として名古屋に生まれる。長兄高安滋郎(十三世宗家)とともに中京能楽界の中心的存在で、十三世死去の後、昭和53年以降宗家預りとして活躍。能楽協会理事・同名古屋支部長等を歴任。日本能楽会会員(昭和47年以来)。勲五等双光旭日章を追贈。

●丹下直次郎氏

シテ方観世流。5年4月3日、京都学際病院で死去。享年98歳。明治29年京都生れ。40年井上勝太郎に入門。謡専門に井上家四代に師事。日本能楽会会員(昭和50年以来)。『観世』平成五年七月号に追悼記事。

●北原彌三郎氏

北原丹誠堂社主。5年4月16日、心不全のため、自宅にて死去。享年94歳。約五十年にわたって雑誌『観世』の印刷を手掛けた。

●狩野勇雄氏

シテ方喜多流。5年4月22日、老衰のため、熊本の悠愛病院で死去。享年97歳。大正5年友枝為城に入門。熊本県能楽協会理事。平成3年熊本県近代文化功労者に選ばれる。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●西 一祥氏

日本大学教授。古典文学専攻。5年4月23日、心筋梗塞のため、東京都品川区の病院で死去。享年65歳。著書『世阿弥研究』『世阿弥—人と芸術』『能楽海外公演史要』(共著)ほか多数。

●佐伯栄造氏

シテ方観世流。5年5月25日、急性心不全のため、社会保险神戸中央病院で死去。享年83歳。明治42年生れ、昭和6年井上嘉介に師事。能楽協会神戸支部相談役。神戸観世会理事。日本能楽会会員(昭和50年以来)。『観世』平成五年九月号に追悼記事

●観世元昭氏

シテ方観世流。5年7月27日、肝臓癌のため、東海大学付属病院で死去。享年56歳。昭和12年1月9日、二十四世観世左近の次男として東京に生れ、観世華雪・七世観世鍔之丞に師事。昭和15年、仕舞「老松」で初舞台。以後、兄の元正（二十五世左近）を助け、流勢の拡大・発展に貢献。45年大阪能楽観賞会の「望月」で大阪文化祭賞、平成元年昭門会の「芭蕉」で芸術選奨文部大臣賞を受賞。能楽協会理事長・観世会理事長等を歴任。海外公演にも積極的で、アメリカ・メキシコ・フランス・インド・オーストラリア等で能楽団を率いて演能した。一見豪放、しかし繊細な芸風の持ち主であった。5年8月24日勲四等瑞宝章を叙勲。『能楽タイムズ』平成五年九月号、『観昭』平成五年十月号、『観世』平成五年十月号が追悼記事を集めている。日本能楽会会員（昭和47年以来）。

●犀川小太郎氏

シテ方宝生流。5年8月7日、脳梗塞のため金沢市浅ノ川総合病院で死去。享年91歳。明治35年横浜生れ。8歳で十六世宝生九郎知栄に入門、十七世宝生九郎重英に師事。金沢能楽会相談役・能楽協会北陸支部常議員等を歴任。石川県知事特別功労賞受賞。『宝生』平成五年十一月号に追悼記事。

●松木千冬氏

シテ方観世流。5年9月5日、急性心不全のため、東京都千代田区の病院で死去。享年62歳。武田太加志に師事。日本能楽会会員（昭和57年以来）。

●廣末 保氏

元法政大学教授。日本近世文学専攻。10月26日、腎不全のため、柏市の国立癌センター東病院で死去。享年71歳。法政大文学部長・能楽研究所所長・観世寿夫記念法政大学能楽賞選考委員（設定された昭和54年から平成二年まで）等を歴任。著書『元禄文学研究』『近松序説』『もう一つの日本美―前近代の悪と死』『芭蕉―その旅と俳諧』『悪場所の発想―伝承の創造的回復』『元禄期の文学と俗』『西鶴の小説』『可能性としての芭蕉』『芭蕉―俳諧の精神と方法』ほか多数。『日本文学誌要』48号（一九九三年一二月）に追悼記事。

●小島芳雄氏

シテ方観世流。5年11月7日、心不全のため、浦安市の自宅で死去。享年73歳。小島曙光の長男。初世観世喜之・二世喜之に師事。日本能楽会会員（昭和50年以来）。

●鈴木一雄氏

シテ方観世流。5年11月28日、老衰のため、神奈川県茅ヶ崎市で死去。享年90歳。明治36年7月3日、ワキ方進藤流の芸系を引く鈴木亥三郎の長男として東京府に生れる。二世梅若実・梅若万三郎および二十四世観世左近に師事。戦前は万三郎家の番頭格として活躍。故実に明るく、観世流のみならず能界の長老として明治の気骨を示された。能楽研究所では、鴻山文庫所蔵の初の能楽フィルム『名家の面影』の再生に御協力いただいた。また亡くなる数日前に、家伝の脇方伝書ほかの貴重書を能楽研究所に寄贈された。